

高田測候所

八十六年の歴史に「くぎり」 十月から無人化

高田は豪雪地帯であることから測候所の設置運動が起り、大正十一年に県営として大手町に開所、昭和十四年に国営に移管されました。長年にわたる職員による観測業務と桜、梅、カエデ、ウグイス、ツバメなどの動植物、初雪などの季節観測の役目を終え、無人化の計器で新たな役割を果たすことになりました。

「雪の観測をする気象機器の開発、研究、試験のメッカ」、高田の雪質とワックスの研究や桜の開花予報としての役割をこなしてきました。

昭和五十一年の豪雪時に書かれた記事（毎日グラフ）に雪国での苦勞話が載っておりまし。

『今年もまた豪雪に見舞われた。この地方で雪を呼ぶといわれる「一発雷」の雷鳴

がとどろいたのち、一夜にして一メートル余の積雪を記録した。その後も何時止むことも知れず何日も降り続く「白魔」に、

道路は屋根の高さまで埋まり、屋根にも人の背丈に及ぶ雪塊がのった。横なぐりに吹きまくる粉雪に見渡す限り凹凸の無くなったような白一色の景色に町も村も変貌した。こんな中、昼夜通しの三時間ごとの観測、データの発信、地方気象台から出る天気予報と測候所の観測資料との分析・検討をこなしていた。

測候所の構内に立てられた雪尺は四メートル、この日は一メートル九十四センチを記録した。』

八十六年の間に蓄積された基本的な資料は気象庁へ、残りの文献、資料、書籍の殆どは上越市公文書館へ寄贈された。

（編集部）



毎日グラフ（昭和51年2月29日号）より転載



大正11年開所当時の測候所 上越タイムスより転載



毎日グラフ（昭和51年2月29日号）より転載